

---

# やる気ゼロ学生のLAST RUN

静寂の月光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

やる気ゼロ学生のLAST RUN

### 【Nコード】

N5449X

### 【作者名】

静寂の月光

### 【あらすじ】

体育祭。

周りの生徒がテンション高く張り切っている中で、俺だけはやる気がなかった。

体育祭を舞台とした恋愛？ものです。  
学校の文化祭用にと書いたものを投稿しました。  
たぶん、誰も見てくれてないので……。

訂正しながら投稿していくので、スローペースでいきます。

part1??やる気ゼロ?? (前書き)

誤字脱字があれば指摘を！

part 1??やる気ゼロ??

九月某日。夏のような日差しが容赦なく照らす。

本来なら、週末で遊び呆けている日曜日に、俺、桐浜雅人は額に汗を流しながら校庭に立っていた。

今、校長が前で体育祭の注意について話している。

そう、校長が言っている通り今日は体育祭。

高校生にもなつて、いまさら何を改まって注意する必要があるのだろうか？ などと考え、暇をつぶす。

俺は今日、まったくと言っていいほど乗り気ではない。理由は簡単、運動が苦手なのだ。

そんな俺に比べ、周りのみんなはやる気に満ち溢れている。

それもそのはず。

体育祭と言えば、女子にいいかっこを見せるのに最適な場所。

好きな女子がいる奴はやる気が出ないわけがない。

さらに、今の我が校、橘榛高校にはマドンナ的存在がいる。

ほしかげななか  
星風七夏だ。

成績、ルックスともに完璧で、運動もできる。しかも、誰にも分け隔てなく話し、人を嫌うことがない。

さらには、男子全体の九割が入っている非公認のファンクラブまである。まさにマドンナ。ちなみに同じクラスである。

なかなかテンションの上がる状況だ。

あれから五分。

校長の話が終わり、生徒は、それぞれのクラスごとにトラック上半分を囲むように用意されている席??生徒の席と反対側に設置された本部から見て、左が一年、正面が二年、右には三年??に戻る。

その途中、「星風さんに、星風さんに俺のかつこいい姿を!」、「貴様なんぞには星風さんは振り向かんわ!俺に振り向くんのだ!」、「なにを言っている、この俺だ!」、などの口論があちこちから聞こえてきた。

俺も星風のことには嫌いではない。

むしろ好きだ。

だが、さっきも言った通り、俺は運動が苦手である。

運動部を含む、生徒のほとんどが本気を出しまくる中、活躍できるわけがない。

俺は早速、この『星風争奪戦』もどきから降りることにした。

体育祭にはふさわしい、すっきりした秋晴れの中、ため息をつきながら自分の席に着く。

「相変わらずやる気なさそうだな、マサ」

競技開始までの間、何をしようかと考えていると、隣の男子生徒、親友の松原爽太まっはらそうたが声をかけてきた。こいつは俺と違い、運動が得意な人間だ。そのため、自信とやる気に満ち溢れている。

俺も爽太みたいに運動ができたらな。

などと、ありもしない空想を思い描きながら、再びため息をつく。

「そっちはやる気すごいな。まさかの星風狙いか？」

「俺はちげーよ。運動できりゃいいんだって。」

「お前はそうだな。確認するまでもなかったわ」

と、苦笑いを浮かべる。

爽太は、運動ができればいい人なのであんまり恋愛に興味がない。

そのおかげで、星風のことを想っている俺ばかりいじられているけど。

応援や罵声の声を聞きながら、普段通り爽太と話していると、第一種目の時間、九時十五分になった。

俺の出番は第三競技の二百メートル走なので、もう少し後になる。正直、めんどい。

そこからは、クラスの奴らを混ぜながら話を続ける。

雑音として、火薬の発砲音に似た音を何度も聞いていると、放送が入った。

「二百メートル走に出る生徒は、トラックのスタート地点に来てください。繰り返します……」

「お、マサの出番か」

「みたいだな。んじゃ、行ってくるわ」

放送がかかり、俺の出る種目、二百メートル走の呼び出しがかかる。クラスメイトに声をかけられながら、席を後にした。



part1??やる気ゼロ??(後書き)

次回の投稿は未定です。

もうすぐテストなので……

part2??二百メートル走??(前書き)

意外と時間があったので投稿。

part2???二百メートル走???

クラスの席からちょうど真反対側にある、本部席。

その前にある競技トラックのスタート地点に、俺は立っている。

先ほどひとつ前の競技、百メートルハードルが終わり、今から二百メートル走が始まるところだ。

橘榛高校はどちらかと言えば田舎の学校だ。

生徒数が少なく、各学年四十人四クラスしかない。

そのため、四人一組で走る。

ライバルは三人。

だが、最初<sup>はな</sup>つから勝利を諦めている俺は全くやる気がない。

ライバルなど関係ないも同然。

適当に走り、適当に四位をとる事しか頭にない。

「次、さっさと入れ！」

体育の熱血教師が声を大にして生徒を誘導する。

その声のおかげか、はたまた星風のためか、生徒はみんなやる気に満ち溢れている。

……俺以外は。

あんな声、聞いたところで俺の身体能力が上がるわけでもない。したがって、運動ができない俺に教師がなにを言おうと無駄だ。

俺の出番は二年の最後だったらしく、ずいぶん待たされた。

やる気の無さから、適当に運動場を見渡す。

すると、ある人物が目に入ってきた。

星風七夏。

俺の席の近くで友達と楽しそうに話している。

素直にきれいだと思った。

同時にかなり恥ずかしくなった俺は、視線をそらそうとする。が、そらす直前に星風がこちらを見た。

当然目が合う。

一瞬ののち、星風は視線を戻した。

直後、俺の周りに待機している同級生たちが、「今星風さん俺の方見てた!」、「馬鹿言え! 俺だ!」、「何度も言わせるなよ? 俺だ!」、などの口論を繰り広げる。

今まで誰にも振り向かなかったんだ。

体育祭で活躍した程度で振り向くわけがない。

おめでたい奴らだ。

俺は勘違いなんてしない。

期待なんて、するだけ無駄だから……。

そう、心の中でつぶやく。

さっき、無駄に期待した自分に言い聞かせるように。

それから少しして、俺の出番になった。

トラックに入り、横を見る。

運動部をやっているやつばかりだった。

星風狙いからか、目つきが本気マジになっている。

俺は目立たないように走ろう。

そう思いながら、クラウチングスタートの構えをとる。

全員準備ができたらしき、教師の声が聞こえてきた。

「次行くぞ！ 全力で走れよ！」

嫌だっつての。

心の中でそう返すと同時に、ピストルの音が鳴り響く。

その音と同時に走り出した。

スタートダッシュを決めた一番左端、一組の奴が頭一つ抜ける。

やはり、運動をしてるやつらは早い。

それに負けじと、二、三組の奴も必死に追っている。

その比べ、四組の俺は三人から見て後ろから目立たない程度の距離を取り、適当に走っていた。

そのままの順位で、ゴールを迎える。

一位は一組、二位は三組で三位は二組となった。

四組の俺はもちろん四位。

みんな息切れしている中、俺だけ息切れしていないのが適当にや  
ったという何よりの証拠である。

ばれないように、少し歩きながら適当に周りを見てみると、星風  
がこちらを見ていた。

まあ、向こうがすぐに目をそらしたけど。

同じクラスのよしみでレースくらいは見ててくれたのだから？

そんなことを考えながら、席に戻った。

part2??二百メートル走??(後書き)

誤字脱字等の指摘があればお願いします。



part 3 事件発生 (前書き)

修正に思ったより時間がかかる……

part 3 事件発生

クラスに戻ると、「惜しかったな」、「あのメンバーじゃ勝てないよな、ドンマイ」、などと、クラスの男友達が励ましてくれた。

その通りで、本気を出してはいなかったがああのメンバーでは俺ごときでは勝てない。

励ましてくれた奴らに軽い会釈をしながら席に戻る。

「見事に手、抜いてたな」

「やっぱり爽太にはばれるか」

席に着くや否や、隣の爽太から早速指摘された。

やっぱり爽太には隠せない。

「確かに手は抜いたが、どうせあのメンバーじゃ勝てないだろ？」

苦笑いしながら、当たり前のことを言ってみる。

クラスの奴らも同意したのでこれには同意してくる、と思ったのだが。

「そうか？ マサなら勝てる相手だったぞ？」

「……へ？」

俺は今、とてつもなく変な顔をしているだろう。

そりゃそうだ。

部活ばかりしている、スポーツマンしかいない二百メートル走をろくに運動もしていない俺が勝てると言い出したのだ。

驚きもする。

とうとう夏みたいな日差しに頭でもいかれたか？

それとも、まさかの過大評価か？

無駄に頭を働かせ、暇つぶしに爽太の言ったことについて考えてみる。

突然、彼女にしては珍しい、低い声が聞こえた。

「……桐浜君、どうして全力を出さないの？」

星風が、腰まで伸びた髪を風になびかせながら俺に話しかけてきた。

なぜ俺なんかに話を？

と、考えもしたが、手を抜いていたのに気付いたことも驚きだ。

こればかりは、驚きが隠せない。

しかし、なんで？

「なんで俺なんかに……いや、それより、なぜ手を抜いたことに気付いた？」

「なぜって、見ていたからでしょ？ それより、質問に答えてくれないかしら？」

星風にしては珍しく機嫌が悪い。

いつも笑顔を振りまいている存在だからかなり珍しく思える。

言い方に少しイラッときた。

普通に言えればいいのに、何か喧嘩を売ってるような、そんな言い方。

ふつうに話そうとしたが、低めの声が出た。

「……別にいいだろ。本気を出そうが手を抜こうが結果は同じだ」  
「そうじゃないでしょ？ みんな頑張っているのだからま……コホン、桐浜君もがんばってよ」

「俺なんか全力で頑張ったって結果は同じだって。俺なんかにかまってる暇あるなら今走っているクラスメイトを応援してやれよ」

そう言っただ百メートル走をやっているグラウンドを指さす。

爽太から、「お前……言いすぎだ」と小声で聞こえてきた。

俺もその一声で冷静さを取り戻し、罪悪感を覚えながら星風を見る。

星風が口を開く瞬間、俺たちの話を聞いていたのか、クラスの女子（名前は確か高藤）、が話に入ってきた。

「七夏、そんな奴のことより、タオルタオル！」

「高藤さん、タオルがどうかしたの？」

興味を持った爽太が高藤の話に入る。

星風はむすつとした顔で俺の説教を終える。

なんだ？

このすごい罪悪感は。

「あ、松原君！ 七夏のタオルが誰かに盗まれたの！」

— 大事だった。

高藤の口から出た一言は、俺たち二人が思ってたより、ずっと重い話。

これじゃ、俺が星風に謝るチャンスが流れる。

そう考えたが、すでにタイミングは逃した後。

今更謝る空気でもない。

そう思い、落ち込んでいると、爽太がどンドン話を進めていく。

「どこにあった誰のタオル？ 犯人の目星は？」

「えっと、場所は私達の教室。犯人の目星はないよ。ちらっと見たっていう証言はあるけど」

「どんな特徴？」

気が付くと、俺も話に入っていた。

どうやらミステリー好きの血が騒いだらしい。

俺はこの問題を解決する気だ。

というかそのことしか考えていない。

「えっと、黒い帽子をかぶってて、少し太り気味だったって」

「……はぁー」

目撃証言を聞いた瞬間、二人でため息をつくと同時にやる気が下がった。

太り気味で黒い帽子、星風関係といえれば一人しかいない。

あきれた声で、二人に答えを言う。

「犯人、黒川な」

「……あー」

「黒川君……」

答えを聞いた二人は、あきれたような声でうなだれていた。

黒川は少し前から、こういう問題を起こすようになっていた。

俺やクラスの奴らがさんざん注意を促してきたが……とうとう大きな問題を起こした形である。

だが、そんなことは実際どうでもよく、問題はとうやって見つかるか。

高藤から聞いた話では、すでにファンクラブの皆様が校舎内をくまなく探している。

が、五分ほど経った今も何も連絡が無いらしい。

「少し時間をくれ」

そう言つと、俺は頭の中に学校の校舎全体の図を引っ張り出してくる。

そこから、黒川がよくいる場所、隠れそうな場所を探し出し、携帯を取り出した。

電話帳から星風のファンクラブ会長の名前を引っ張り出し、電話をかける。

ファンクラブは普段ちょっと敬遠気味だが、こういう時は頼るし



かない。

……ファンクラブ星風信者って、怖いんだもん。

抜け駆けしようものなら容赦なく殺<sup>や</sup>るし。

会長と最低限の内容確認と、黒川がいそうな場所を教え合い、電話を切った。

だが、本番はここから。

今の電話で分かったのだが、ファンクラブのメンバーが約五分、校舎内を探し続けて見つからない。

ということは、校舎内にいない可能性の方が高い。

今度は校舎内だけでなく、学校の敷地全体の地図を頭の中に引っ張りだした。

そこから、今度は校舎外の隠れそうな場所を探し出す。

今日は体育祭。

ということは……。

「あそこか！」

「っておい！ マサ！」

爽太の声を無視し、全速力で走り出す。

面倒なことになる前に！

走りながら携帯を取り出し、ファンクラブ会長のアドレスを再び引っぱり出す。

手を回しておく必要があるかもしれない。

メールを打ち、携帯の電源を切っておく。

問い詰めてる時に携帯が鳴ると面倒になるからな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5449x/>

---

やる気ゼロ学生のLAST RUN

2011年10月20日02時10分発行